

133 ロダンと日本 (2022年10月20日)

19世紀を代表する彫刻家のオーギュスト・ロダン (1840-1917) は、日本で最も名が知られた彫刻家と言っても過言ではありません。「考える人」、「地獄の門」、「カレーの市民」といったロダンの代表作は、日本でも見ることができます。ロダンの影響を受けた日本の芸術家は、数多くいます。同時に、ロダンも日本美術から影響を受けていました。

ヨーロッパでジャポニスムがブームとなった時代に、ロダンも日本美術を愛した一人でした。パリのロダン美術館には、浮世絵を始めとする日本の美術品が残されています。背景に浮世絵がちりばめられたフィンセント・ファン・ゴッホ作の「タンギー爺さん」(\*)があることでも知られています。この美術館には、ロダンが蒐集した日本美術品だけでなく、ロダンが作った日本人女性のマスクもあります。この女性は、ロダンのモデルとなった唯一の日本人の花子です。



Isaki et rascasse avec tiges de gingembre  
par UTAGAWA Hiroshige, vers 1832  
歌川広重「魚づくし かさご、いさきに生姜」1832年頃  
© musée Rodin/ロダン美術館蔵

花子 (本名：太田ひさ) (1868-1945) は、貧しい幼少時代を過ごし、旅芸人の一座に入って子役として身を立てました。20歳で最初の結婚をしましたが家庭生活には恵まれず、34歳でデンマークに渡りました。ヨーロッパで「花子」として女優デビューを果たし、花子が出演した公演はイギリス、ドイツ、ロシア、トルコなど各地で成功を収めました。ロダンはマルセイユで行われた公演を訪れ、花子が演じた切腹のシーンに目を奪われ、ロダンは花子に自分のモデルになってほしいと頼みました。こうして、花子はロダンのモデルを務めるようになり、ロダンは約60点の花子の作品を作りました。



## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

もう一つ、ロダンと日本との関係を伝えるエピソードがあります。1910年に創刊された文芸雑誌「白樺」で、ロダン特集号を組むことになりました。白樺には、武者小路実篤や志賀直哉を始めとする作家、画家の有島生馬、民藝運動の主唱者である柳宗悦など、当時の日本の知識階級が参加していました。特集号の発行前に、白樺の同人からロダン宛てに手紙を出しました。ロダンからの返信には、浮世絵を送ってくれたらロダン自身の作品を送ると書いてありました。そこで、日本から浮世絵を送ると、ロダンから「ロダン夫人」、「巴里ゴロツキの首」、「或る小さき影」(写真は、ロダン美術館が所蔵する同じタイトルの作品)の3点(現在は大原美術館所蔵)が送られてきました。実際にロダンの作品を観た白樺の同人たちは、大変興奮したと伝えられています。これらは、初めて日本にもたらされたロダンの作品です。



*Petite Ombre* par Auguste RODIN  
vers 1881-1882  
オーギュスト・ロダン作「或る小さき影」  
1881-1882年頃  
© musée Rodin/ロダン美術館蔵

ロダンは、晩年を過ごしたパリ郊外のムードンの館(現在はムードン・ロダン美術館)に置かれている「考える人」の下で、静かに眠っています。ロダンが活躍した時代に、ロダンは日本人芸術家の憧れの存在でした。同時に、日本美術や日本人モデルが、ロダンの創作活動をより豊かなものとしていました。



こうした日本とのつながりがあることで、ロダンは現代の日本人にも愛されているのかもしれませんが。

\* 69 絵画の中の日本

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100205843.pdf>